



6月27日(日)「大豆トラスト畑の土に触れる交流会」が北村の大豆畑にて行われました(写真左上は雑草取り作業)。7月3日(土)「小麦トラスト産地見学ツアー」で美唄市の峰樺地区を訪れました。(写真右上、左下は小麦の手刈り体験。右下は昼食&交流会)

発行

北海道食の自給ネットワーク

札幌市東区北15条東18丁目2-17 (有)ワードエム内

TEL(090)2818-5502 FAX(011)789-8890

ホームページアドレス <http://kirari.com/wm/jk-Site/>

E-mail:moto@wordm.com

WTOは「食料・環境問題」を 解決し、明るい未来を約束するか？

北海道大学大学院農学研究科助教授 飯澤理一郎

「WTO」(世界貿易機関)が誕生して早や十年弱。農業関連の新聞や雑誌ではもちろんのこと、一般の新聞や雑誌でも、その文字にしばしばお目にかかるようになりました。特に二〇〇二―三年、「新たなラウンド(交渉)」が大詰めを迎えているとかで、その頻度がとみに増してきたようです。

▲アメリカの「双子の赤字」から始まったGATTウルグアイラウンド▼

ところで、WTOという聞き慣れない機関は、どんな経過を辿り、何の目的をもって十年ほど前に突然誕生したのでしょうか。

今から二十年ほど前(一九八六年)、ウルグアイのプンタ・デル・エステに各国の首脳が集まり、GATT(関税貿易一般協定)の新ラウンド(交渉)の開始

を宣言したのをご記憶の方も多いのではないかと思います。巷に言う「ウルグアイ・ラウンド」のスタートです。

何故、その時期に新ラウンドは開始されたのでしょうか。当時の状況を振り返ると、そこには何か、偶然的要因ではなく、必然的“要因が大きく陰を落としていたように思われます。

「昔のこととて……」などと諦めずに思い返して見て下さい。一九八〇年代中葉と言えば、「世界の盟主」を任ずるアメリカの経済的「凋落」と日本の「躍進」が大いに話題となっていた時期でした。「日本型経営」がもてはやされ、日本企業は破竹の勢いで世界各国に進出し、新工場を建て、ビルや土地、拳げ句の果てには有名な絵画や美術品等を買ひ漁っていました。片やアメリカは財政と貿易の「双子の赤字」に苦しみ、国内経済も「じり貧」状態に陥っていました。

中でも、アメリカの主力輸出品、農産物・食料は惨憺たる状況に陥っていました。それまで世界を制していたアメリカの農産物・食料は、一方でEU

の補助金付き輸出に苦しめられ、他方で発展途上国の「低価格」輸出に市場を奪われ続けていました。しかし、「盟主」アメリカとしては、国内の農家を見殺しにするわけにはいきません。一方でセツト・アサイド政策(生産制限政策)を、他方で不足払い制度やマーケティング・ローン政策を展開してきました。何れも膨大な財政支出を伴います。価格・所得支持費だけでも八十年の二十七億ドルから九十年には六十五億ドル、九十一年には百八億ドルへと急増し、財政を大きく圧迫していました。こうした状況を何時までも続けているわけにはいきません。

「何とか国際価格を上げ、輸出額を増やし、財政負担・貿易赤字を減らしたい」とアメリカが切望したとしても何の不思議もありません。それには「各国の農業を“衰退”させ、国際市場を“不足”状況にすること」が、最も手っ取り早い方法であることは誰の目にも明らかでしょう。それを実現するにはどうするか。如何に「盟主」を任じていても、見え見えの“ごり押し”は出

来ません。「国際協調」の衣がどうしても求められません。同ラウンドはこうした迷惑の下に立ち上げられたような気がしてなりません。その意味で、それはアメリカの「国益実現の場」であったと言っても過言ではないでしょう。

△WTO。何故、

—(INTERNATIONAL)

ではなくW(WORLD)かV
そのことを最も鮮明に物語るのは、交渉・議論を絶えずリードしたのがアメリカの提起した「ゼロ・オプション」だったことです。ゼロ・オプションとは、輸入数量制限や課徴金、檢疫・添加物基準などの各種の「国境保護措置」を全廃し、また国内農業保護措置や輸出補助金などの「貿易障害的補助金」を全廃するというものです。各国は国内農業や食料消費の事情等により、各種の「国境保護措置」や農業「保護」措置、消費者「保護」措置(添加物・残留農薬規制等を含む)を取つてきました。それを全廃しようと言うのですから、こと農産物・食料に関する限り、経済的な国境」を取り払い、世界を

一つの「経済圏」にし、後は企業の自由な活動に任せようとするものと言つて良いでしょう。全面的な「関税化」と言い、国内農業保護措置の大幅削減、「衛生植物検疫措置の適用に関する協定」(SPS協定)による添加物基準等の国際基準への調和と言ひ、その狙いが大きく実現されたと言えましょう。

二つは、交渉が主にアメリカとEUの間で展開され、圧倒的多数を占める発展途上国が事実上「ツンボ」状態に置かれてきたことです。紆余曲折を経た交渉の妥結の決め手になったのがアメリカ・EU間で繰り広げられた「秘密交渉」、「ブレアハウス合意」でした。その他の交渉でも発展途上国には交渉の身はもちろん、交渉・会議のあることさえ充分には知らせられなかつたとも言われます。一方的に押しまくられた感のある妥結結果を見れば、日本も半ば「ツンボ」状態に置かれていたのではないかとさえ疑いたくなるほどのです。世界各国に重大な影響を及ぼす交渉にしては極めて異例な展開と言わざるをえません。

三つは、とは言え自国が農産物・食料の大輸出国のせいもあつてか、あるいは「超大国(地域)」EUへの配慮もあつてか、輸入国に特段に厳しく輸出国にすこぶる甘いものになつたと言うことです。ごり押的に輸入自由化や国内農業保護措置の大幅削減を迫つた割には輸出国にはすこぶる甘く、輸出義務「すなわち輸入国の食料調達確保措置」は取られておらず、また、輸出補助金の削減幅も極めて軽微に止められました。輸出国に優しい「片務的な協定」と言えます。

四つは、交渉の最終盤になつて、唐突にWTOなる機関の設立が浮上してきたことです。GATTでは、何故駄目だったのでしょうか。GATTは関税貿易一般「協定」です。協定ではどうしても各国の事情が色濃く反映されるをえません。事実、GATTでは加盟時の様々な条件・約束があり、農産物・食料貿易の「全面的自由化」や各国の各種国内「保護」措置等の撤廃は、容易には実現しませんでした。「工業における成功。農業における失敗」

とGATTが擲論される所以です。「全面的自由化」や「国内保護措置等の全廃」を実現するには、「協定」よりも格段に強制力のある「国際機関」、各国の国内法や諸措置に上位するものになければなりません。こうした思惑からWTOは誕生したと言えますし、アメリカの狙いもそこにあつたと見ることも出来ると思われます。名は体を表す。ITO (INTERNATIONAL) ではなくWTO (WORLD) だった事情も、そんな所にありそうです。

▲WTOではなく、

フェア・トレード・「地産地消」の精神で

彩られた別の行き方を

さて、WTO成立以来十年余。各国の農業は大いに発展し、世界の食料問題あるいは環境問題は大きく緩和されてきたのでしょうか。答えは一〇〇%否と言つても過言ではありません。日本はもちろん、アメリカや農産物の輸出拡大を目論んでいたインドネシア等発展途上国の農家さえも、価格下落や輸入増大等に大いに苦しめられているようです。世界の飢餓人口も大きく減

少する兆しは全く見えません。どうやら、WTOから甘い汁を吸つたのは穀物メジャーや多国籍食品企業だけだったようです。穀物メジャーや多国籍食品企業にとつて「輸入自由化」は、それだけ商売の機会を拡大するわけですから当然と言えば当然です。しかし、過度の輸出入が物質循環や水循環を狂わせ、環境問題を激化する危険性の高いことは決して見落とされるべきではありません。

こうしたこともあつてか、二〇〇〇年には纏める予定であつたいわゆる「次期交渉」は、特に発展途上国やNGO等の反発の中で、九九年十一月のシアトル閣僚会議で立ち上げに失敗し、ようやく交渉開始の合意に漕ぎ着けたのは〇〇年十一月のドーハ閣僚会議のことでした。しかも、その後も、どんな枠組みで交渉するのかと言う点の話しが纏まらず、ようやく纏まったのはつい先だつて〇四年七月の一般理事会のことでしかありません。しかし、その内容はどちらともそれそうな優れて「玉虫色」のものでしかありません。

発足十年、WTOも大きな曲がり角に來ていると言えましよう。

今、農家にとつても消費者にとつてもどうやら「益」のないWTOで行くのか、WTOを廃し、国内的にも国際的にもフェア・トレードや「地産地消」の精神で彩られた全く別の行き方をするのか。私たちに鋭く問われているような気がしてなりません。

飯澤理一郎氏プロフィール

一九四八年 山形県長井市生まれ

北海道大学理学部生物学科卒業、農学博士。

名寄女子短期大学講師、専修大学短期大学助教・教授を経て

一九九四年十月 北海道大学農学部助教
大学院大学化に伴い、現在北海道大学大学院農学研究科助教

(研究分野) 食料経済学、食品産業論
(著 書) 「農産加工業の展開構造」

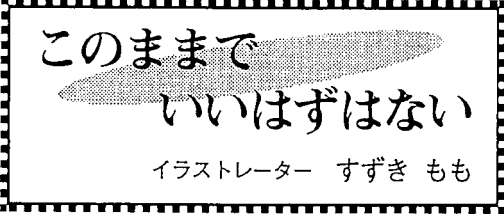
二〇〇一年大月書店「アジアの食料・農産物市場と日本」

二〇〇〇年大月書店「問われるガット農産物自由貿易」など

リレートーク

私の中の危機感はいつ生まれたのだろう。父が戦争体験者だったからだろうか；父は十六歳で終戦を迎えて少年兵として満州から引き上げてきたはずだ。かなり悲惨な光景の中の食事情の話しを幼い時から時々聞かされたからかもしれない。中学生の時に気づいたことだが、家のカレーにはジャガイモが入っていない。戦時中に食べ過ぎて、見るのも嫌いになったとか。；五十代になって子どもがみな家を離れると米つぶもほとんど食べず、麺類とパンを食べていたのは、やっぱり戦時中に「貧乏人は麦を食え」と、いうフレーズに理不尽さを感じていたからだという。そんな私の小さな時の食卓は、高度成長期を迎えても父の戦争体験がどこか尾をひいたような食卓だったかもしれない。

長々と父のことを書いてしまったが、昨年他界し、しみじみ思うと口数の少ない父から学んだことは、きつと軽い危機感を持つことだったのかもしれない。だからといって私はか



なり大雑把でいい加減な人間で、決して神経質ではないのだけれど、やっぱり危機感だけはあって、それが今は食へと向かっている。

二十年前、すでにスローフードを実践していた人たちに会うことがあって、自然の恵みを余すことなくいただく姿勢に凄く影響されたのが、食に興味が出てくる一端だった。しかしそれはあまりにも今まで良かれと思って食べてきたものと違う視点だったので、ある意味カルチャーショックだった。そこに併せ持つていた危機感が出てきているんな本を読んでみると；もう、危機感と言うより危機と危険がいつぱい。あーなんて平和ボケしてたんだろう。；そして子どもが出来ることより未来のことが気になる。そう、このままでいいはずはない。なおさら危機感が募る今日この頃、国内の自給率が三〇〜四〇％だそう。こんなに自然破壊し、異常気象が続き、食料を自給できないなんて。；そんな事実がありながら食料をもっとも大事にしない国でもある。

さて、私に出来る事ってなんだろう。まずは自分の足下から。惜しくも？ 農業と言う道を選んていない私が出来ることは、まっとうな農家（漁師）の（生活者）になること、まっとうな生産者への応援を欠かさない様々な方々へ、私自身がエール送り続けること、そして絵を描く以外あまり役に立たない猫の手のような「手」を使っていたただけなのである。

小麦プロジェクト

黄金色の畑を訪ねて

産地見学交流ツアー報告

プロジェクトリーダー 米田 香

去る七月三日、小麦トラスト参加者を対象に行った「産地見学交流ツアー」はトラストの生産地の一つである美唄市の峰樺地区を訪れました。参加者はスタッフを含めて二十七名。遠くからは深川や名寄からの参加もありました。すつきりしない空模様が気がかりでしたがマイクロボスの中は美唄の事前学習を農業クイズで楽しみながら向かいました。

現地では美唄市役所、JAみねのぶ、空知中央地区農業改良普及センターの皆さんとご対面。生産者の石川利雄さんから製麺性が良いと言われている美唄の秋まき小麦ホクシンは小麦作付面積二、四〇〇haのうち約九割を占め、他の麦と違い背丈があるため倒伏も起こり易い。今年は天候も良く、収穫時期は平年並みの七月二十日頃と生育説明を伺った後に手刈り体験。熟成した麦の穂はカマを当て少し力を加えるだけで簡単に刈ることができました。そして水田の畦道にハーブを移植する援農作業。美唄はこの手法を用いて害虫を防ぎ、有機・低農薬の米作り（ハーブ米）を実現しています。等間隔に植え付けた約二百株のアップルミントの苗は作業連携良く、あつという間に終了。三年前に植え付けられたミントはすでに五十cm丈程になり、畦道は甘い香の垣根に成長していました。この後、広大な麦畑の刈り取り出番を待つコンバインや播種機を見せて頂きました。美唄は米生産地でもあり、ライ

スセンターに置かれた機械の大きさと播種・刈り取り部品を替えながら動かすその精密な作りに参加者は興味津々でした。作業後は峰樺中学校へ移動し、生産者や奥さん達と一緒に昼食の準備にとりかかりました。昼食用のそば打ちは、峰延手打ちそば愛好会の皆さんと生産者森川和徳さんの指導の下に行い、職人技に参加者の目は真剣そのもの。恐る恐る生地に触れ、慣れない包丁で麺を切りながらも、完成したそばは見事な出来栄。奥さん達指導の麦人形も、初めて作ったとは思えないほど可愛い人形たちでした。昼食は手打ちそば、美唄名物のとりめし、とれたて野菜のサラダ、漬物。地元のお食材で作られた料理のおいしさは格別！生産者や消費者、約五十名が一堂に介しての昼食は、まさに「顔の見える」貴重な場でした。食後の交流会では、生産者や市役所、JAの方々トラストへ対する思い、参加者の「道産小麦を身近で購入したい」といった話題を中心に意見交換を行いました。ツアー後、参加者から「現在抱えている課題や小麦の市場に関してなど、聞きたいことが多々あったが時間が足りなかった」という声もありましたが、お互いの思いを再確認するとてもよい機会となりました。生産量日本一を誇る美唄の農産物ハスカップを視察した帰路の車内は、刈り取った麦やお土産に頂いたハーブ苗、ドライフラワー用にと髭のぴんと出ている春小麦の「春よ恋」、買い求めたハスカップなどいっぱいになりました。生産地を間近に見て、生産者と交流を図ることにより、更にトラストや農業への思いが強まったように感じました。無事に麦の収穫が終わり、今年もおいしいトラスト製品となって手元に届くことを心待ちにしたいと思います。

大豆プロジェクト

「トラスト畑の土に触れる交流会」

「初めまして北村」

プロジェクトスタツフ 清水 のり子

好天に恵まれた六月二十七日、今年度からトラストの新しい生産地になる北村砂浜の大豆畑で「トラスト畑の土に触れる交流会」が行われました。参加者は十八名。若者グループの参加もあり華やかな雰囲気になりました。援農作業は一、二〇坪ある広い大豆畑の雑草取り。百メートル近くある畝に向い、生長を妨げる雑草を抜く作業にかかります。この時期の雑草は、大豆と競うように伸びる為、大方は機械で抜き取りますが、大豆の根元にしっかりと兄弟のように居座る雑草は、手で根気よく抜かなくてはなりません。炎天下の中、一人二畝をただ黙々と作業を続けました。畑に腰をかがめてする作業は大変な労働であることを実感し、汗を拭いながら秋の収穫へ期待をふくらませました。今年の品種はツルムスメといい、煮豆にすると柔らかいのが特徴です。また、大豆は繊細で本葉が出る五月中旬ごろにジャガイモヒゲナガアブラムシからウイルス感染する「わいか病」が発生しないように気を遣います。「わいか病」に罹ると葉は矮化し生長が止り生産に影響が出る厄介な病害です。草取りは、密植栽培しているので大変ですが、生産者は、近所の人手による草取りを収穫までに三回ほど手作業で行っています。生産者の大豆に対する思いや苦勞が、食べる側の消費者

に直接伝わる良い機会に恵まれたと思えました。

草取り作業が終わり待望の昼食。

昼食会場の砂浜コミュニティセンターは、砂浜地区自慢の建物で、館内は近代的設備とバリアフリー構造。地区住民の憩いの場であることを実感しながら、生産者と一緒に昼食テーブルを囲みました。

今回のメニューは、大豆のキーマカレー、大豆ポタージュ、新鮮野菜に大豆ドレッシングそれに大豆

を使ったビスコッティ(クッキー系)。デザートは、差入れのメロン。毎年好評の盛り沢山の大豆料理に歓声をあげ、「大豆も手を加えると、こんな素晴らしい料理になるんですね」「美味しいものを食べたい。美味しいものは、高いとは思わない」など、そして「土に触れることは滅多に無い事なので参加してみても良かった」という声。中でも好評のキーマカレーに「普通のカレーはあまり食べてはくれず、今日のカレーを家で作ってみたい」と作り方を聞く方。茹で大豆の保存法を聞く方ありで、また若い方の積極的な質問に生産者と大いに盛りあがりました。先輩参加者から「これがいいと言いう意思表示ができる魅力ある消費者と生産者がいかに手をつなぐかが大事だ」と締めくくり、

時間が足りないほど充実した交流会でした。

プロジェクトからの報告



ふれんど学習ほけ食育講座

プロジェクトリーダー 松本 啓 佑

来年度から本格開講を目指している食育講座ですが、今年度は三回のコースでプレ開講します。

作り手の見える農水産物を自ら調理しながら、楽しく美味しい料理の方法や食生活のこと、生産現場のことなどを学ぶカリキュラムを用意しています。今盛んに叫ばれている「食育」も、子どもたち自らが食に積極的に関わっていくことが大事であり、そのきっかけ作りをこの講座が担えればと思います。

九月から十一月までの月一回の開講。対象は小学校五・六年生。三回の講座は原則毎回参加となり、受講料は五千円です。(見学バス代、食材費などを含む)日程と開講内容は左記のとおりです。

●第一回 季節の野菜を使った料理教室と生産者のお話

日時 九月二十五日(土) 十時から十五時まで

会場 札幌市消費者センター食材研究室(札幌エルプラザ二階)

●第二回 牧場見学とバター作り体験 ※保護者参加も可能

日時 十月九日(土) 九時から十五時まで

会場 (南)小林牧場(江別市) 他

●第三回 お米とお魚を使った料理教室と漁業関係者によるお魚講義

日時 十一月六日(土) 十時から十五時まで

会場 第一回と同じ

定員は二十名ですが、まだ余裕があります。小学校高学年のお子さんを持つ会員の方はぜひお子さんに薦めてください。またお知り合いの方にも紹介していただくと幸いです。締切は八月三十一日(火)。詳細は松本まで。

(電話)〇九〇一五二二四一八九二五

ふれあい学習広場「ふれんど」

巨大ズッキーニ再び…

ふれんどリーダー 大 湊 寿 隆

二年目を迎えたふれんどの活動は、今年も五月十六日の農業小学校の入学式から始まりました。

初日こそ、あいにくの雨空の中での授業でしたが、その後は好天に恵まれ作物の生育も順調に見えました。しかし、六月下旬から七月下旬にかけてはなかなか小学校に行くことができず、一ヶ月ぶりに目にした光景は、とても「畑」とは言えない「森」であり、どこに何が植えられているのか分からないほど。それでも、炎天下の中、必死に草を引っっこ抜き、中から出てきた野菜の収穫は意外に多く(草がその数倍あったのは言うまでもない)、持ち帰って早速参加者皆で調理しました。その中には定番となったあの野菜も…。八月に入ってから、毎週末「畑」の管理を行うなど、通常よりもペースを上げて、この秋の会員交流会への出品に備えていますのでご安心ください。

その他には、五月に「ふれん井」を創刊、七月には二日間だけでしたが仁木町の藤崎会員の果樹園での農作業ボランティア(「ふれん井」創刊号を参照)を体験しました。現在は九月十八日に行う会員交流会の準備を進めています。

また、私たちの活動状況をいつも見ていただけるように、食の自給ネットワークのホームページ(アドレスは表紙に掲載)内にあれんどのページを八月七日に開設しました。農業

小学校の開講に合わせて、二週に一度くらいのペースで更新していく予定です。是非ご覧ください。

プロジェクトからの報告

大豆と小麦の二つのトラスト運動をすすめていく中で、生産者と消費者の間に様々な機関が介在している事がわかります。今回は、農業改良普及センターについてご紹介いたします。

農業改良普及センターは、

何をやるの？

空知中央地区農業改良普及センター 島 恵子

農業改良普及センターは北海道の最先機関で、全道五十六ヶ所の普及センターに専門担当普及員(水稲・畑作・園芸・畜産・農家経営等)が配置されています。しかし、一般の方々の普及センターの知名度は「？」ではないでしょうか。

そこで、私たち普及員(普及センターで働く職員)の活動の一端を紹介させて頂きます。

一、地域農業と農業者への支援

連日多くの作物の病気や害虫が持ち込まれたり、電話が鳴ります。時には、農業試験場に鑑定を依頼し、より確実な情報の提供に努めています。また、作物の生育状況に応じたアドバイスも重要な仕事です。冬期間も次年度の営農計画の大事な時期。安全で、良質な農産物の生産をキーポイントに地域の農業課題についてじっくり話し合いをもちます。

二、試験研究成果を地域に伝じて組み立てて実証

試験場で開発された新品種等を地域試験圃で栽培し地域適応性実証後、地域の農業者へ情報提供を行います。

三、新規就農者農業後継者への支援

当普及センターでは関係機関(市町村、農協)で担い手プロジェクトチームを組み、新規就農者や新規学卒者等担い手を巡回し、栽培技術や研修等の支援を実施し、更に研修希望

紹介します この人 こんな話

に応えるため短期の研修セミナー(農村ゼミナール)で各種コース(水稲・園芸・花卉・畑作・農家経営・農業経営)を開催し、基礎技術向上の一助を担っています。また、後継者や若いお嫁さん達のグループ活動支援も普及の大きな仕事です。

四、農村女性の活動支援

農村女性の自主学習グループ(簿記グループ等)、農産加工販売グループ等への活動支援とネットワーク化を推進し交流、研修の設定・助言により活動の高度化を目指しています。ネットワークの活動として、札幌市内のスーパーでの直売活動を成功させ、大きな自信となっています。農産物の付加価値向上(直売活動や農産物加工)の相談や技術支援も増加傾向にあり、経営の一部門を担う女性達も増え、この女性達が地域活性化の起爆剤となっています。

五、食農教育

小学校との連携により田植えから収穫・脱穀をしてごはんになるまでの体験を指導。なかなか水田に入れなかった子も「精米した手のお米って温かい」と興奮気味！春から秋までの体験で、お米の大切さと大変さを実感した子供達。また、消費者を畑に招いての収穫体験等、生産現場と消費者からの「食べる人の顔が見えることにより農業に、張り合いが出てきた」と感想ができました。

以上、日々の普及員の活動を紹介させて頂きました。今年の夏は例年になく猛暑。台風のニュースにハラハラドキドキしながら豊作を信じてライトバンを走らせている毎日です。最後にトラスト参加者の皆さんを起点に農業者と消費者の相互理解が更に進展しますように！

「食の自給の実現のために」

(南) Z E R O 菊地尊治

食の自給を私達は何故求めるのでしょうか。食の自給実現の向こうに安心して永続できる社会を私達は見ているのではないのでしょうか。外からの影響に左右されない、自分達らしい社会を築き、それを未来の人に伝えたいと思っているのではないのでしょうか。そうだとすると、私達は単純に食糧の自給率向上を願うだけでは済まないと思います。今私達の食糧消費は、自分達の身体にとって、また環境や永続する社会にとっても多くの問題を抱えています。理想的な食糧消費のあり方が鮮明に描かれてこそ、目指すべき食糧自給のあり方が見えて来ます。そうでなければ成人病や廃棄食品の増加を促進する食の自給体制を実現してしまふことになってしまいます。

先日農水省が、食糧輸入が完全に停止した場合の三食の典型的メニューをシミュレーションしておりました。現行一人当たり二、六五一kcal/日の摂取熱量を一、七六〇kcal/日に落とさねばならない。肉類摂取は現在の1/10に落とすし、もつぱらイモを食わねばならない等々、貧しい食生活を強いられることを強調していました。しかしその三食のメニューを見たとき、私が最初に感じたことは「ヘルシー」ということであった。餓死の心配ではありませんでした。自給自足の貧しい社会に戻ることは出来ないと言われることがありますが、飽食成人病の今の社会は変わらねばならないことも確かです。

私達が食の自給を願うとき、私達の食生活のことよりも、私達の生命を支える農業・畜産・漁業の充実を考えなければならぬと思います。外国からの食糧が途絶えても、一七六〇kcal/日の熱量を得られるのはこれらの産業が今の水準を保っているからです。農業・畜産・漁業が衰退すれば、外国からの食糧が途絶えた時に餓死は現実となります。北海道の農業・畜産・漁業の発展を願わずにはられません。

私は食糧生産に二つの側面があると考えます。一つは売上げ、あるいは外貨を稼ぐ産業という側面、もう一つは地域の健康と命を支える産業という側面です。前者は商売の産地間競争に打ち勝ちGDP(国内総生産)に貢献する産業です。この産業では「商才」が不可欠です。後者は、商品ではなく栄養源として地域の人々の口に直接入る食品の生産に関わる仕事です。この産業では「商売」よりも地域社会の存続に強い関心が払われます。社会が存続するにはこれら両方の産業が必要だと思います。国際競争に勝てない産業であっても、地域の存続に必要な産業はあります。私は「二元経済制度」としてこの二つの産業をバランスさせる仕組みが社会に必要と考えます。そして後者の仕事に、子供や高齢者が地域マネーを通して関わることの出来るシステムの実現を求めます。「食の自給」の願いは、このような社会の仕組み、システムが出来て初めて実現するのではないのでしょうか。これは政府や農水省に指示されることなく、私達北海道の人々によって実現しなければなりません。

会員からの

メッセージ

「亀の歩み」

松山郡厚沢部町 石井 綾子

今から九ヶ月前、私のお腹に赤ちゃんがやって来ました。素早くテキパキと動くことが「デキル人間」と思いこんで生きてきたのですが、七kgのおもりを身につけていては、素早く動くことは不可能だと悟りました。開き直って「ゆつくりのんびり」動くようになりましたが、「一時のことだから許されるよね」とまだ「ゆつくりのんびり」におそるおそるなのです。

ところが以前の私よりこの「ゆつくりのんびり」の私の方が丁寧に仕事を片付けられるのです。おまけに途中で飽きて嫌になったりもしないのです。それはまるで時速六十kmのスピードも八十kmのスピードも目的地に着く時間に大差はないけれど、六十kmの方が心にゆとりがあり、安全でもあるという事に似ています。三十歳を目前にして私は、やっと「自分のペース」と

いうものを理解する事ができました。

素早くテキパキと動く事は今でも私の理想なのですが、未熟な私はいついついあせって「自分のペース」を見失いがちです。どうやらお腹の子との九ヶ月間の共存のお陰で、いやおうなしに「自分のペース」で動くことができるようになったみたいです。

初めはしんどいばかりの妊娠でしたが、十ヶ月目を迎えた共存生活が間もなく終わる今となっては、自分を見つめ直す機会をくれたこの子に感謝しています。あと少しでこの世に出てくるこの子から、私はこの先いろいろなものを与えてもらうのでしょうか。



「グルメかスローフードか」

札幌市中央区 巻 知里

ひとところテレビなどで盛んに取り上げられた「グルメ番組」。近頃はスローフードというテーマが取り上げられる。何れも一般にはあまり見ることもなく食べることもできない料理、食材が主役である。さらに、いまはスローフードからスローライフなる言葉まで派生しつつある。八十年代の初め、映画に

もなり浅野温子の好演が話題となった片岡義男の「スローなブギにしてくれ」という小説があった。スローという言葉からは、こつちを連想してしまふ。

現代のスローがかなり異なるのは確かだ。高度成長期からバブルを経て、さらに空白の十年がとうに過ぎ、新しい世紀を迎えながら先の見えない現代。スローのかけ声は、何を意味するのだろうか。この時代の流れにブレーキをかけるコトができるのか。あるいは、せめてイエローカードとなりうるのか。さらに十年を経なければ、答えは出ないのだろうか。そして、日本人は、イタリアの片田舎に生まれたスローフード運動のコンセプトを理解し、原点を知り、そのポリシーを食生活に生かすことができるのだろうか。流行(ハヤリ)ごみの日本人に。イタリアに飛んだところで、どこまでその本質に迫れるのだろうか。そう、風土が違う。文化が違う。気質が違う。なにより、その生き方が違う。異国のムーブメント、トレンドに流されることなく、足下を見つめよう。瘦せた土地で太陽が作つたトマトの赤さ、本物の味を知ることから始めよう。

事務局からのお知らせ

● 2004年 会員交流会へのお誘い ●

日時：9月18日(土) am10:00～pm6:00 出入自由参加
場所：由仁町 ふれあい体験農園「みたむら」(当代表 経営農園)
会費：食事代を含む入場料 500円

猛暑でバテ気味のこの夏でしたが、会員の皆さんは、お元気に乗り切られましたでしょうか？

さて、恒例となりました「自給ネット会員交流会」を開催します。企画は、ふれあい学習広場「ふれんど」の若者スタッフたち。この夏、とっても元気な雑草と闘ったつしんの野菜を使った料理の数々、お楽しみゲームも検討中です！

夕日に染まっていく山々を眺め、語り、ゆったりとした時の流れの中…そんな気ままな一日を皆さんと一緒に過ごしませんか？(詳細は、同封の別紙ご案内をご覧ください)

問い合わせ先：事務局 090-2879-2170

お願い!! 2004年度の会費納入はお済みですか？

今回、未確認の会員さんへ振込書を同封しました。(8月23日現在) 9月3日(金)までに郵便局より振替を完了させて下さい。

尚、小麦トラスト・大豆トラスト参加は、まだお受けしています。

小麦 12,000円 大豆2kg 1,500円 味噌加工(8kg味噌) 5,500円

※郵便振替番号:02700-1-47533 口座:北海道食の自給ネットワークまで

編集後記

暑い夏も終わり、ようやくホッと一息できた今年の猛暑でした。

さて、自給ネットも少しずつですがネットワークの輪が広がってきたのではないのでしょうか？各プロジェクトも事業本番となり大忙しの様です。自給ネットは様々な形で参加できるネットワークです。ぜひ、お気軽にスタッフとしてまた参加者として色々なプロジェクトに参加してみてください。素敵な出会いが生まれるかもしれませんよ。

(事務局 本村)

募集しています

会報をご覧になりあなたの感想・情報を FAX・郵送して下さい。

「紹介したい人」

「ユニークな催し企画」

「試して見て調理方法等ご紹介下さい。あなたも『空とぶてんと虫』編集に参加しませんか。カット、写真、もちろん投稿大歓迎！